

もの言う牧師のエッセー 第330話

平昌五輪

①「最高の戦い」

まだ15歳だった前回のソチ五輪と同じく、スノーボード男子ハーフパイプ決勝に挑んだ平野歩夢くん。2回目の滑走で「成功すれば金メダルが取れる」と長らく取り組んでいた高難度のエアが連続で決まると、満員の観客席から大歓声が響きわたった。「この技が成功したのを実際に見たのは初めてです。何かが起こると感じてはいた。彼のベストです」と興奮を隠せない彼の父、英功さん。

しかし、その時点で一位となった彼の後に、過去五輪2回優勝の米国ショーン・ホワイトの滑走が始まったが、何とホワイトも完璧な演技を披露。全会衆が今や固唾を呑んで結果を待つ。しかしホワイトの得点が歩夢くんを上回り、又しても銀メダルに。思わず唇をかむ歩夢くん。拍手をしながら英功さんは「最高の戦いでした」。「悔しそうでしたね。もう一步だった。しかし4年の間にけがもあって苦しんだから、今の歩夢がいる」と思いやる兄の英樹さん。

最高の努力をして、最高の結果を出しても、最高の収穫に与るとは限らない。怪我やスランプで苦しむことや、悔しい思いをすることも。ましてや負けて「最高の戦いだった」と言うのはかなり難しい。だが聖書は言う。

「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。」

ピリピ人への手紙3章12節、

と。こう語るのは、迫害や投獄に悩まされながらも、聖書中で最も業績を残したパウロだが、我々を導き、祝福を下さる神の愛の中で生きることによって、苦難でさえ喜ぶことに気付かされる。だからこそ、神の前に悔いのない最高の戦いを日々続けていくことが肝要であり、また、思わぬ結果となっても「最高の戦いだった」と感謝できるのではなかろうか。

